

# モンテーニュの思索の歩み

——『エッセー』の構造とその論理に見る——（その十一）

竹 田 英 尚

## Montaigne, sa Vie et sa Pensée, dans le Développement de la Structure et de la Logique des Essais (11)

Hidenao TAKEDA

### 第二章 個性の開花

#### （４）自己描写

執筆第二期に自己描写は『エッセー』のもっとも顕著な特色になる。著者モンテーニュの執筆はきわめて強く、『エッセー』の中でも度々自己描写について弁明する。彼は今や『エッセー』を自己描写の書にしようと思っているようである。もちろん自己描写は執筆第二期に突然現われた現象ではない。すでに執筆第一期の章の中にその萌芽があった。私達は執筆第一期の自己描写には二つの性格があることを指摘した。一つは「事実」に学ぶモンテーニュの思索から生まれたものである。彼は古今の書籍が教える事例を手本にしながら、自己の見聞の中に「事実」を発見する判断力を磨いた。そして、自己を仔細に見つめさえすれば、もっとも有意義な自己自身という「事実」の領域が開けてくることを知ったのである。一つは無位無官の無聊の日々を送る中で増々稀薄になってゆく存在感が原因である。思想を媒介にする自己表現に飽き足りないモンテーニュは、直接自己を描いて作品の中に自らの存在を固定することによって、稀薄な存在感を補填しようとしたのである。つまり前者は自己描写の認識的な起源であり、後者は感情的な起源である。そして『エッセー』における自己描写の進化は両者の調和、統一を求める成長の動きなのである。従って自己描写の認識的な側面と感情的な側面は執筆第二期においても重要な視点になる。自己描写の二側面の分裂と融合の有様を見ることが執筆第二期における進化を考察することになるはずである。

自己描写は『エッセー』の随想の中で孤立しているのではない。何かの随想の流れの中で現われ、それには何らかの理由がある。それは観察と思索のモンテーニュ的なリズムの一環でもある。自己描写をそれが現われる随想の構造と論理から捉えるならば、「自」と「他」の対峙の構造が注目すべき特徴であることに気付くであろう。しばしば自己描写は他者と対峙した構造を伴っている。自己を語ることが他者を批判する方向へ発展する例や、他者の観察から自己描写が生まれる例が数多く見られるのである。たとえば「自」→「他」の展開の一例として、

私の中にある生れつきの能力はどうかと申しますと、この書物はその吟味なのですが、その重荷にあえいでいるのを感じます。私の理解も判断も、手探りでもろめきながら、やっとのことで進んでおります……そして私の頭の中に浮かぶすべてのことを手当たり次第に語り、それを私自身の天賦の能力だけで表現しようとするときに、絶えずあることですが、偶然に、すぐれた著者たちの中に、私が扱おうと思ったのと同じ題材におつかったりすると（たとえば、さっきもプルタルコスの中で彼が想像の力について論じているところに出会ったばかりですが）、これらの人たちにくらべて自分がいかに非力で、貧弱で、寝ぼけているかを思い知って、自分自身を憐れんだり、さげすんだりいたします。けれども私は、私の意見が光栄にも彼らと一致するということを得意に思っているのです。また、他の人たちにはないことですが、少くともこれらの著者たちと自分との間に雲泥の差があることをわきまえている点をも得意に思っているのです。そして、それにもかかわらず、私は自分のかくも弱々しく低級な見解を、私が産み出したままの姿で、この比較によって明らかになった欠陥を塗りかえたり、つくろったりせずに、世間に公表するのです。――→と言うのは、さもなくば、私は現代の無分別な著者たちのように化物を生み出すことになるでしょう。彼らは自分のつまらない作品の間に昔の著者たちの文章をそっくり撒き散らし、盗品で自分の評判を高めようとしています……先日、私は次のような一節におつかりました。それまで私はだらだらとフランス語の文章をたどっておりましたが、それはあまりにも血の気がなく、肉も落ち、内容も意味も空っぽで、ただフランス語で綴ってあるというだけの代物でした。その長い退屈な道の果てに、突然、気高い、豊かな、雲居に達するほどの一節に出会ったのです。もしも途中の坂がゆるやかで、登りがちょっと長かったら、いままでたどってきた箇所もいくぶん勘弁できたかも知れません。ところが断崖はあまりにも垂直に切り立っていましたので、最初の六語を見ただけで、私は別の世界に飛び上がったことを悟りました。そこに立ってそれまでたどってきた沼地が実に低く深いを見て、金輪際二度とそこに降りて行く気がしませんでした。もしも私の文章の一つをこんな立派な絵画で飾ったりしたら、他の文章の愚かさ加減があまりにはっきりと明るみに出ることでしよう。<sup>b</sup>（矢印は筆者）

「他」――→「自」の展開の一例を挙げれば、

可能なことと不可能なことを、われわれの能力に照らし合わせて信じられるか、信じられないかによってきめてはならないということは、私が他の箇所で言ったとおりである。また、自分が信じられないことを他人が信ずるのを邪魔するということは、大部分の人がおちいる大きな誤りである。――→私は古代のある人達の魂は私のに比べれば天にまで昇っていると考えている。そして彼らのあとを追うことができないことははっきりわかっているけれども、あんなに高く彼らを昇らせる発条を判断することをやめない。そして彼らの偉

大さを讃嘆する。その高翔を非常に美しいと思い、それを抱きしめる。私の力はそこまで達することはできないが、少なくとも私の判断は心からそれに傾倒する。<sup>2)</sup>(矢印は筆者)

このように自己を描くことによって他者を見つめる視点が定まり、他者の批判的観察が行なわれる。あるいは他者について語るとは他者と異なる自己の個性を確認する行為に変わる。つまり自己描写は自他の間を往来する、観察と認識のリズムの一環なのである。従って「自」と「他」の対峙の構造はさらに次のような構造に発展することもある。『エッセー』では、「自」→「他」, 「他」→「自」の対比的転換のみならず、「自」→「他」→「自」→「他」→「自」と自他の間を往来するリズムがそのまま随想の展開になることもある。<sup>3)</sup>自己を語ることは今やモンテーニュの思索の流れと一体になっているのである。しかも「自」と「他」の緊密な関係は、自己描写が自己の世界に閉塞した観察や思索に陥ることを防いでいる。その関係を通じて自己描写は他者の世界へ広がり、身辺の経験の領域へ思索を導く力になっているのである。

一方「自」と「他」の対峙の構造におけるこれらの自己描写に手前味噌の自己主張を感じる人もあるかも知れない。特に上のように「自」と「他」の対比を取り出した引用を読む時には尚更その印象が強いであろう。モンテーニュの崇拝者ならいざ知らず、普通の読者がどこかにそのような臭気を感じたとしても不思議ではない。『エッセー』の自己描写はすべて冷静で客観的な自己観察であるわけではない。自己描写には強い自我意識が絡んでいる。『エッセー』で自己を描くことは、ただ自己にのみ目を注いだ省察ではなく、他者と対峙する中で自己を見つめ、自他の差異を明らかにして個性的な自我を刻み出す行為なのである。少し皮肉な見方をすれば自己描写には常に手前味噌の自己主張めいたところを感じられるであろう。しかし観察と思索の中で他者と対峙する緊張なくして、どうして真の自我が形成されよう。何の自我の臭気もない自己描写などむしろ無意味であろう。すでに執筆第一期から「孤独について」(I—XXXIX)の章でも言っているように、無位無官の生活を享受するためには、「自分自身を持っていれば、何も失ったことにはならない」<sup>4)</sup>ような強い自我を確立しなければならない。自己描写は「自」と「他」の対峙の構造の上に立ってこのような自我の確立を志向しているのである。

「自」と「他」の対峙の構造における他者は必ずしもモンテーニュと同じ時代の人に限る必要はない。「他」は彼の思想的研鑽の対象である、ギリシャやローマの哲学者や思想に置き代えることもできる。自己描写はこのような「他」と対峙していることもある。<sup>5)</sup>自己描写はこの文化的な対峙によって思想的な自己形成の方法となる。古人の一言一句と自分自身の経験の間に具体的な照応をもたらし、自分の生きる糧として古人の思想を摂取することを可能にするのである。次の例はこのような自己描写の効果を想像させよう。

①私はこれを始めてから七つ八つ年をとった。その間に何か新しい獲物がなかったわけではない。私はこの気前のよい年月のおかげで疝痛と往き来するようになった……私はあ

らゆる病気の中でもっとも悪い、もっとも急激な、もっとも苦しい、もっとも命取りの、もっとも不治の病気につかまっている。私はすでに五回か六回、きわめて長い、苦しい発作を味わった。②だが、自慢するわけではないが、死の恐怖から解放された魂をもち、医学がわれわれの頭をのぼせ上がらせるあの脅迫や、結論や、帰結などからもまた解放された魂をもった人々にとっては、この状態の中にあっても、おのれを支える何かを見いだせるものだ。③しかし、実際の痛みそのものも、落ちついた人がそのために狂乱と絶望におちいるほど強烈なものではない。少なくとも私は疝痛から次のような利益を得た。つまり、私がいままで自分の上になすことのできなかったこと、すなわち、死と完全に仲直りし、仲よしになることを、この疝痛がなしとげてくれるかも知れないということだ。なぜなら、疝痛が私を攻め立て、悩ますことが多いほどそれだけ死は私にとって恐ろしくなくなるだろうから。私はすでに、ただ生きているというだけで人生につながっているというところまで来ている。疝痛はこの絆をもほどこしてくれるであろう。そしてどうか神様、もしもその激しさが私の力を越えるような場合に、それが私を、死を愛し望むという同じように間違った別の極端に走らせることのないようにしてください。

死を恐れても、望んでもいけない。

この二つの極端は恐るべき情念であるが、前者は後者よりもずっと扱いやすい。

④それに私は、「不幸に堪えるときには平然とした顔つきで、それをものともしない泰然たる態度をとれ」と規定する掟を、常に形式的で役に立たないと思ってきた。物事の核心と本質のみを目指す哲学がなぜこうした無益な外見にこだわるのか。それではまるで哲学は人に芝居の所作を教えるようなものではないか。我々が自然に、余儀なく受ける動きや変化を押し止めることがその管轄の内にあると 言うのだろうか。それならば哲学はソクラテスに、恋とか恥のために赤くなったり、骨が振り上げられて瞬いたり、熱に冒されて震えて汗をかいったりすることを止めさせてみるがいい。自由に思いのままになる詩の描写も、完全無欠な人間に描こうとする人物にさえ涙を禁じてはいない。こんな役目は我々の顔つきや立ち居振る舞いを正すのを商売にしている人達に任せるべきであろう。哲学はそれが教化しようと引き受けたわれわれの悟性を指導するだけに止めるべきだ。悟性の歩みを整え、悟性の手綱を取って、その任務を果たさせるべきである。疝痛の攻撃に対しては、我々の精神が自己を失わないように、平常の歩みを続けられるように支えてやるがよい。苦痛と戦い、これをもちこたえて、恥かしくもその足もとにひれ伏すことのないように支えてやるがよい。精神が戦いに熱中し、興奮しても、それに打ち倒されて顛倒しないように、支えてやるがよい。⑤これほど極端な不幸の中で、われわれにそれほど自制した態度を要求するのは残酷である。立派に戦いさえすれば顔をしかめるくらいは誰でもよいことだ。われわれの肝心要の思考と行動が平生の通りであれば十分だ。肉体の方は泣

き声を出して楽になるなら泣くがよい。身をもがいて楽になるならいくらでもじたばたするがよい。大声をはりあげて叫べば（ある医者たちはこれが妊婦のお産を助けると言っているように）いくらかでも病気が消散するような気がするなら、あるいはそれで苦痛がまぎれると思うなら、できるだけ叫ぶがよい。われわれは、哲学によって新しい仕事を付け加えなくとも、病気のときにはすることがいっぱいある。以上のことは、この病気にゆすぶられて泣き叫び暴れ廻る人々を日常よく見かけるので、その人々を弁護するために述べたのである。⑥ところで、この私はどうかというと、いままでは彼らよりも少しましな顔でこの病気を堪えてきた。もっとも、上品な外見を保とうと無理をしたわけではない。私はそんな優越を問題にしないからだ……私も激痛にさいなまれるときはうなるし、やきもきする。だが自暴自棄になったり、逆情したりすることはけっしてない。そしてこのひどい苦痛の合間には、私はすぐ普通の状態に戻る。心の乱れも動揺もなしに、話したり笑ったり、研究したりする。なぜなら、そのために驚いたのは私の魂そのものではなくて、感覚と、肉体に関する部分だけだからだ。これは確かに、私が日頃から思索研鑽を積んでこ<sup>6)</sup>ういう出来事に自分を準備しておいたおかげである。（番号は筆者）

モンテーニュは④の最初に書いてあるような哲学を常に拒否して来たわけではない。執筆第一期の頃にはストイックな思想に心が引かれたこともあったはずである。彼には④のような哲学を再検討してみる必要があったのである。上記の随想では彼は自己描写とともにそれを行なっている。①から③の所で持病を語り、その苦しい体験を語ることは、自分の経験のなかで④のような哲学を吟味する方向へ発展する。そして⑤の「日常よく見かける」事例の観察を通して、⑥のような自分の態度が定まる。それはもはや④の厳しい哲学とも⑤の一般の人達とも違った立場である。「上品な外見を保とう」とする無理もせず、さりとて「日頃から思索研鑽を積んでこ<sup>6)</sup>ういう出来事に自分を準備しておく」ことも怠らない境地である。モンテーニュは文化的な対峙のもとで自己を描くことによって自己の境地をはっきりと自覚するのである。④から⑥の随想には病気の体験と哲学的反省が結びついた言葉が随処に見られるであろう。このように自己描写は自己の経験のレベルにまで哲学を引き降ろし、古人の思想を自分の人生から捉え直すことを促したに違いない。それは一方で自分という人間を見つめつつ思想を吟味する方法でもある。自己描写は自分の個性に則して思想を摂取する効果的な方法であったに違いない。しかしながらそのような効果は必然的に自己描写に伴うわけではない。自己を語ることから自然に生じるものでもない。モンテーニュの自己描写が「自」と「他」の文化的な対峙の構造を含んでいたからである。言葉の中に閉じ込められた思想は自我と対峙する構造の上で本当に我々の血肉となって吸収されるのである。

「自」と「他」の対峙の構造は執筆第一期に溯ることができる。殆ど書誌的事例に埋まっている初期の章にもこの構造が認められる。読書で出会った事例を解釈し、判断を試みる練習が、

他人の意見と自分の意見を対比する形式に支えられている場合がある。たとえば一つの事例とプルタルコスの解釈を紹介したあと、モンテニョは彼自身の解釈と自分の解釈を立証する事例を書き加えてみる。こうして、彼の解釈以外はすべて読書からの収穫にすぎないが、自己の意見を対峙する試みによって、受動的な読書は判断を磨く著作に変わるのである。この対峙によって古人の書を読むことが、「われわれの脳味噌を他人のそれにこすり合せて磨く<sup>8)</sup>」思索になるのである。このような例においては確かに「自」と「他」の関係は、一つの事例に関する他人の解釈と自分の解釈のささやかな対峙にすぎない。しかしながらそこにも上記の自己描写のような自他の間の緊張関係がある。このような緊張関係を含んだ思索が『エッセー』を自己の存在の代償にしようとする自我意識と結びつく時、「自」と「他」の対峙の構造をもつ自己描写が生まれて来ても不思議ではない。この自己描写は同じ構造の上に展開した進化なのである。

私達が『エッセー』を読んで実際に随想の流れに身を置いたときには、もはや自己描写の手前味噌のような臭気を感じられないならば、それはモンテニョが一方では自分自身を一つの事実例として眺める訓練を積んでいるからであろう。彼は執筆第一期に書誌的事例を手本にして少しずつ「事実」の領域を開拓して行った。書誌的事例の上に彼自身が見聞した「事実」を加えながら、モンテニョはついに自己自身という「事実」の層を発見した。その結果自己描写が思索の展開を支える「事実」の一例として現われて来るのである。たとえば次のような場合である。

①われわれの理解、われわれの判断、要するに、われわれの精神全体の能力は、体の運動と変化に応じてその影響を受けることは確かである。しかもその変化はしじゅうである。われわれは病気のときよりも健康なときに、いっそう潑刺とした精神、敏活な記憶、鋭敏な理性をもつではないか。歓喜と愉快はわれわれの心の前に現われた事柄を悲嘆と憂鬱の中にあるときとはまったく別の姿に見せるではないか……②わが国の法廷における弁護士たちの間には、たまたま何かしら上機嫌でおだやかな寛大な気分になっている裁判官に当たった罪人について、「この好運に浴せ」という言葉がよく使われる。なぜなら、確かに、判決というものは、時には処罰のほうによけいに傾いて、より峻厳になることもあれば、時にはいっそう寛大で、容赦のほうに傾くこともあるからである。自分の家から、痛風の痛みや、嫉妬や、召使の盗みなどを引きずってくる裁判官は、胸の中が憤怒でいっぱいになっているから、判決も当然その方向に変わってゆくに違いない……③この理性は同一の問題のまわりに百種類もの相反する理由をもちうる性質のものであって、鉛と蠟から成る屈伸自在の、どんな形、どんな寸法にも合やすことのできる道具なのである。われわれはただ、その捏ね方さえ知っていれば事足りるのである。裁判官がどんなに立派な意図をも

うっていても、よほど注意して自分の良心の声を聞かないと（もっともこういうことに時間を費やす人はあまりないが）、友情とか、血縁とか、美貌とか、復讐とかに対する傾きが、あるいはまた、それほど重大なことばかりでなく、われわれにふとあるものを他のものよりも好きにならせたり、理性の許可なしに同じような二つのものの中から一つを選ばせたりする気まぐれや、あるいはこれと似た何かの根も葉もない影が、知らず知らずのうちに彼の判決の中に、どちらか一方の言い分に対する好意や悪感情を忍び込ませ、天秤を傾かせることがありうるのである。④この私は、ほかに大してすることもない人のように、

私は、極寒の大熊座の下で、どの王が天下を震え上がらせ、ティリダテス王が何を恐れているかも一切無頓着だから

自分を仔細に調べ、絶えず自分の上に目を注いでいるが、自分の中に見いだす空虚と無力だけは、どうも口に出して言う気にはなれない。私の足はきわめて不安定で落ちつきが悪く、すぐによろめいてぐらつきやすく、目もひどく狂っていて、空腹のときと食事の後では別人のような気がするほどだ。健康が私にはほほえみかけ、天気が晴れ渡っているときだと私はまったく愛想がいい。足指にたこでもできると、たちまちしかめっ面の、不愉快な、近寄りがたい顔になる。ある時は何でもする気になるかと思うと別のときには何もしたくない。いま私に楽しいものがやがて苦痛となるだろう。私が本を手に取りるとき、ある箇所にはすばらしい美しさを見いだして心を打たれることがある。だが別のときにふたたびその同じ箇所に行き当たると、今度はそれをいくらひっくり返し、おっくり返し、いじくり廻しても駄目である。それはもう私にとっては見知らぬ、形のない塊にすぎない。(番号は筆者)

この随想のもっとも大きな説得力は④の自己観察、自己描写から生まれていると言って良いだろう。法官生活を送ったモンテーニュが語る②や③の話には経験に裏打ちされた的確さがあり、一方④の自己描写には私達の心に滲みる説得力がある。経験的な世界の観察もさることながら、自己観察、自己描写が人間性の内部に浸透した、深い真実味のある論を完成している。このような自己描写は書誌的事例や経験例と同じように論の展開を支える事実例なのである。モンテーニュは経験的な世界よりもさらに深い層にある「事実」として自分自身を見つめ、『エッセー』において自己描写を実行する。自己に目を注いで自らを描くことは一つの事実の発掘となり、客観的な認識行為となる。一事実例として自己を眺める訓練が、自己描写が手前味噌の自己主張に陥ることを防ぎ、客観的な事実性を獲得させるのである。

論の展開を支える事実例としての自己描写の内部にももちろんモンテーニュの自我意識が隠れている。常にこの自己描写は一事実としての役割に甘んじるわけではない。もともとは自分の一例を参照してもらうために始まった話が、展開するにつれて『エッセー』を自己の存在の代償にしようとする自我の欲求が段々と表に現われ、一事実例の範囲を越えた、純粋な自己描写

の色彩りが強くなってゆくことがある。<sup>10)</sup>たとえばこのような展開に自我意識の存在が看取されるのである。事実例としての自己描写は執筆第一期の「実習について」の章における自覚に溯ることができるのであるが、しかしそれにはまだ保留条件が付いていた。つまり、「死に馴れるためには、死に近づくしかない」という「教訓をくみ取らなかったとしたら」、「自分を仔細に見つめ」た分析描写も「まったく空虚なもの」なのである。自己描写はそのような教訓を探究する思索に従属しているものであり、その発見なくしては無価値なのである。<sup>11)</sup>ところが今指摘したような展開はもはやこのような狭い自己描写観を越えている。『エッセー』の中に直接自己を表現して、そこに自己の存在を固定しようとする自我意識が、事実例としての自己描写を段々と純粋な自己描写へ変化させ、自己描写の領域を広げている。モンテーニュが観察する「事実」の層の深化によって現われた自己描写は、彼の自我意識に促されて発展したのである。それはモンテーニュ自身の自己描写観の推移にも現われている。本稿の冒頭で自己描写の二側面を要約した言葉で言えば、モンテーニュは執筆第一期では認識的な側面のみを、逆に執筆第二期では感情的な側面のみを語っている。すなわち執筆第一期以後自己描写を発展させたのは自我意識であるがゆえに、モンテーニュは執筆第二期に感情的な側面から自己描写を釈明しなければならないのである。この点については最後に執筆第二期におけるモンテーニュ自身の自己描写観を考察する際にさらに詳しく論じるであろう。

随想の展開に占める位置に注意して自己描写が現われる構造を把握するとき、執筆第一期と執筆第二期の共通性が浮かび上がってくる。すでに執筆第一期に「私」の話が論の展開の中で事実例の役を務めていることもあれば、人の意見と自分の意見を併記する素朴な対峙の形式のほかに、わずかではあるが「自」と「他」が対峙する自己描写もある。執筆第一期も執筆第二期も自己描写はともに同じ構造の上に成り立っている。つまり、殆ど書誌的事例や借用した思想で埋まった没個性の外見に隠れて、すでにこのような構造があったからこそ、のちの発展が生まれたのである。それはのちの進化の種子だったのである。たとえ執筆第一期では自己の観察や分析も浅く未熟であり、自己描写の数もわずかであるとしても、それを支えている構造は執筆第二期に大きく発展する可能性を秘めていたのである。執筆第二期においてこの構造の上に立つ自己描写がモンテーニュの思索を促し、認識を深め、思想を成熟させていることはすでに見た通りである。

執筆第一期と執筆第二期の自己描写の違いは、一つは目に見えてその数が増えたこと、一つは自己描写の領域が広がったこと、一つは随想の展開に果たす役割がはるかに大きくなったこと、一つは思索のリズムと一体になって来たこと、これらの視点から理解できるであろう。今までに所々でこれらの事に触れてはいるが、さらに詳しい論考が必要なのは言うまでもない。一般に従来の研究は両時期の差異に目を向けているので、本稿では両時期に共通なものを捉えて自己描写を論じてみた。今指摘した四つの視点から進化を考えることは別の機会に譲らざる

を得ない。執筆第二期までの到達点として、ただ次のことを述べておこう。

今までに見た自己描写は何か別の事を論じている随想の要所要所に現われたものであった。すでに執筆第一期にあった基本的な構造が執筆第二期の章において発展している姿であった。いわば今までの自己描写は、『エッセー』という作品を書く中で、書誌的事例にしる、経験的な事実にしる、古人の思想にしる、外の世界を浸蝕してゆく自我の発現形態である。恐らくこの浸蝕によって外在する世界が十分自己のうちに取り込まれた結果、執筆第二期には自己と世界が対等の位置に立った随想の章や自己と世界の関係が逆転した章が出現する。それは第二巻第十章と第二巻第十七章の二つの章である。「書物について」(II-X)の章では、愛読する作品を語り、詩人や哲学者や歴史家を語るにつれて、それらに反応するモンテーニュ、それらに判断を下す彼、そんな彼の判断力、精神、魂が描き出されてゆく。この章は作品や作家の批評でもなければ、ただ自分自身を描いた自己描写でもない。そこには外在的な世界と自我が均衡した自己描写の様式が見られるのである。一方「自惚れについて」(II-XVII)の章は自己描写が一貫している。「私」について語ることが随想の展開を導いてゆく。この章ではモンテーニュ自身に関する以外の話題はすべて自己描写を契機にして現われる。自己を描くことから外の世界の考察が生まれている。まさに自己と世界の関係のコペルニクス的転回が行なわれたのである。こうして自己描写によってモンテーニュの自我は完全に思索の世界を浸蝕し、『エッセー』の著作と自己描写は表裏一体のものになったのである。

執筆第二期に自己描写が頻繁になるとともに、モンテーニュのその釈明もまた多くなっていく。私達は最後にモンテーニュ自身の自己描写観を検討してみなければならない。と同時に一体自己描写とは何なのか考えてみる必要がある。私達はいままでのところ、肉体的な特徴にしる精神的な特性にしるモンテーニュが直接自分自身のことを語っている部分を自己描写と見なして論考を進めて来た。それは当座の基本的な理解として間違っていない。しかしそれにこだわれば見解を狭めることになる。私達は、直接自分に触れていなくとも、他の事を話している中で本人の人格を察知することができる。モンテーニュもすでに自己描写のこのような領域を目指しているようである。

実際、この書物にあるものもやはり私の気質であり、私の思想なのです。私はこれを、私の信じていることとして示しているの、人の信すべきこととして示しているのではありません。ここでは私は私自身を明らかにすることだけを目指しております。<sup>12)</sup>

私達が自分自身の中を手探りしながら言語表現によって自分の考えを捉えることはただ自分の思想を知ることでない。それは思想の底にある「気質」にもかかわる全人格的な行為であり、まさに自分自身を発見してゆく行為である。『エッセー』を書く中で言語表現のこのような深い関係を悟った時、モンテーニュはそこにも自己描写を広げてゆく。

ここにあるものは私のとりとめもない空想である。これによって私は物事を知らせようとしているのではなく、私を知らせようとしているのである。<sup>13)</sup>

執筆第二期からモンテーニュは直接自己を語らない自己描写の分野を開拓してゆく。それは明らかに彼の思索の深化の結果である。しかしながら「空想」(《fantasies》)によって自分自身を知らせるのは結局すべての文学作品に共通したことではないだろうか。モンテーニュはいかなる方法でこのような自己描写の『エッセー』を書くつもりなのであろうか。この問題は彼の思考法、表題『エッセー』の由来である「エッセー」という思考法に関係する。この関係は次節で述べることにしよう。その理由は、紙数の都合のほかに、執筆第二期にモンテーニュがもっとも弁解する必要があるのは、直接自分自身のことを語る狭義の自己描写だからである。もちろん広義の自己描写は前者の背景をなす重要な自覚であり、のちの発展を展望するためにも注意しておかねばならぬことは言うまでもない。尚この広義の自己描写は現在簡単な形容語で指示するとむしろ誤解を招くので、私達が何の説明も加えずただ自己描写と言う時には、狭義の自己描写を意味することにしておこう。

もっぱら自分のことを語っている章でモンテーニュは今や自分自身が『エッセー』の主題であることを明言しつつ次のように釈明している。その言葉は明快とは言えないが、様々の理由が混交している所にかえて自己描写の複雑な脈絡が感じられるであろう。

①この私の告白の数々から、私の損になるような他のいろいろの欠陥を想像することができよう。しかし、私がどんなふうに私を知らせているにしても、ありのままの自分を知らせているなら、私は目的を達したのだ。②だからこんな愚かな、つまらぬ事柄をあえて筆にすることををも弁護はしない。卑小な私自身を主題にすればこれ以上充実した、確かな事柄には耐えられないのだから。③それに私を駆り立てているのは新奇な、風変わりな気分である。それを自由に走らせてやらねばならない。④ともかく、他人から注意されるまでもなく、私はこれらがすべていかにつまらぬものであるかを、また私の企てがいかに向こう見ずで大胆なものであるかを、よく知っている。⑤私は、私の判断が混乱しなければそれで十分なのだ。これらはその試みのなのだ。⑥私は、ちゃんとばかを承知の上でなら、ばかなことを言ってはならぬという義務はない。自分でわかっていて間違うというのは、私にはあまりにも普通のこと、それ以外の方法で間違うことはほとんどない。私は偶然に間違うことはほとんどない。私の愚かな行為を私の軽卒な考え方のせいにするのは何でもないことだ。なぜなら、私は間違った行為をいつもこの軽卒のせいにせざるをえないのだから。<sup>14)</sup>(番号は筆者)

モンテーニュが「ありのままの自分を知らせているなら、私は目的を達したのだ」と断言するのは二つの理由がある。一つは認識的な理由である。⑤にも言っているようにモンテーニュが色々の事を『エッセー』に書くのはただ自分の判断を試すためである。それならば自分自身が

対象である時には、「判断が混乱」することなく『エッセー』に「ありのままの自分」を描けたならば、彼は立派に目的を達成したことになる。モンテーニュはすでに執筆第一期に『エッセー』を書く目的は自己の判断の試しであると宣言している。しかしまだ判断の対象は殆どすべて書誌的な事例であり、精々自己の見聞する事実例であった。<sup>15)</sup>「実習について」の章において自己という事実の層に到達はしたが、それはまだ「判断の試し」という目的と一致していなかった。「死に馴れるためには、死に近づくしかない」という「教訓をくみ取らなかったとしたら」、「実習について」の章における自己観察も「まったく空虚なもの」なのである。これら二様の自覚はまだ生まれたばかりで孤立していた。ところが執筆第二期の上の言葉では、やや錯綜してはいるが、両者が同じ脈絡の中に現われている。「実習について」の章における自己の発見と第一巻第五十章における判断力の発見がモンテーニュの思索の内部で触れ合い、一つになったことを知らせている。彼にとってともに大切な著作の目的である自己を描くことと判断を試すことが一体の行為になったのである。今や判断の第一の対象（「主題」）は自己自身なのであるから、判断を試すことがすなわち自己を描くことになる。「死に馴れるためには、死に近づくしかない」などという教訓が得られようと得られまいと、自己は常に判断を試みる価値のある一つの世界である。「われわれが自己についてよく言うことも悪くいうことも許さない」<sup>16)</sup>世間の儀礼を憚って自己を判断の対象にしないのは、「儀礼にさらわれて事物の本質を見落し」、<sup>17)</sup>「技藝にかまけて根幹を見捨て」<sup>18)</sup>ることである。「判断はどこにおいても、常にその権利を保持しなければならぬ。自己についても他人についてと同じように、真理が示すところを見ることが正しい」<sup>19)</sup>のである。こうして、外の世界に向けられていた判断は新しく自己という一つの世界をその対象に加える。自己を取り巻く世界も自己自身も同じ認識の世界になる。これは私達が第二巻第十章と第二巻第十七章の随想における自己描写と外の世界の関係からすでに指摘したことでもある。モンテーニュは判断の哲学と自己描写の哲学によって、人間を一方の大世界に対する小宇宙と考える、ルネッサンス期一般の世界観に到達したのである。と言っても漸くその入口に達したばかりである。彼はまだ自己認識を人間認識の中核となし、そこから世界認識を発展させているわけではない。それは彼がまだ完全に自己描写の意義を把握してはいないからである。

モンテーニュが「ありのままの自分を知らせているなら、私は目的を達したのだ」と確言する裏にはさらに別の感情的な意味があると思われる。今説明した認識的な①と⑤の脈絡の周囲には、彼がまだ明確な言葉で表現できない、曖昧な理由が絡んでいる。モンテーニュは理由や目的を抜きにして自己描写にどこか心が引かれるのである（③「私を駆り立てているのは新奇な、風変わりな気分である」）。そして彼はこの「気分」に執着して『エッセー』を書きつづける（③「それを自由に走らせてやらねばならない」）。恐らくこの「気分」には自己描写は何か価値のある作品形式であるはずだと思う予感がまじっているだろう。また「風変りな」独創性

のある作品が生まれるかも知れないと期待する気持もあるだろう。しかし一方自己描写は、すでに何度か触れた如く、モンテーニュの自我が求めた表現形態でもある。モンテーニュは『エッセー』の中に自己を描き、固定することによって、無位無官の生活の中で日毎に稀薄になってゆく存在感を充足しようとしたのである。自己を語る中には常にこのような自我の欲求がある。しかしながらモンテーニュはまだ作品の中で自己を語る大義名分を見出すことができない。自己は判断の対象として価値をもつとしても、それは著作を通して判断力を磨くという別の理由に由来する。判断の練磨の目的から切り離された時には、自己描写はたちまち傲慢な無作法となり、何の意味もなくなる。従ってモンテーニュは自己描写に執着する一方で絶えず弁解しなければならない。しかも②や④や⑥のような釈然としない、個人的な理由を並べなければならない。執筆第二期におけるモンテーニュの弁護は結局自己描写に個人的な存在理由しか与えることができないのである。彼は、頭職に就いて公の行為で自分の価値を示す運命に恵まれなかつた者は自分で感じるとおり自己を描いて、自分の行為と思想を著作に託せば良いと言う<sup>20)</sup>。しかしそれにはただの自画像以上の深い意味はない。彼が『エッセー』に自分を託すのは、「私の姿をありのままに思い出していただく<sup>21)</sup>」ために、「私の性状と能力とを、私の死後数年でも、あるいは数日でも、永もちのするような堅固なものの中に（変質も変化もこうむらせずに）おさめておきたいと思う<sup>22)</sup>」からである。「ここに私の肖像をありのままにうまく描かねばならぬ<sup>23)</sup>」のはその為である。結局彼の自己描写弁護はすべて、「バル・ル・デュックでフランソワ二世に対し、シシリー王ルネが自分を思い出してもらうために描いた自画像を献上するのを見た<sup>24)</sup>」ように、「どうしてわれわれにも、彼が絵筆で自らを描いたように、筆で自らを描くことが許されないことがある<sup>25)</sup>か」と言うのと変わりはない。許されてしかるべきだとただ言う以外の根拠を持っていない。従って、「自己を主題にして書くという企ては、稀有な、優秀な人物で、その評判が人々にその人物を知りたいという何らかの欲望を起こさせるような場合なら許されるであろう<sup>26)</sup>」という批判に対して、モンテーニュはもう論駁の仕様がなない。肖像は「書斎の片隅において……隣人や、肉親や、友人を楽しませるためのものだ<sup>27)</sup>」としか言えないし、「この仕事で私が世間とかかわりをもつことといえば、それは私が世間から、より迅速で、より容易に書くための道具を借りざるを得なかったということだけだ<sup>28)</sup>」と居直るしかない。モンテーニュはまだ曖昧に予感しているにすぎない、自己描写の独創性や人間認識に到る方法的な価値をきっぱりと捨てることによって、確かな個人的な世界に閉じ籠り彼の自己描写に対する執着を守りつづけるのである。

『エッセー』の自己描写の解釈は最後に、もっとも有名な自己描写の弁明である「読者に」という序文に行き当たる。モンテーニュが『エッセー』を出版する時巻頭に付した言葉は、これから公の場に出る出版物の序文としては大変奇妙なものだからである。しかし『エッセー』の自己描写に隠れている自我の欲求を把握している私達には、序文はモンテーニュの真実の感情に即

した言葉であることが容易に理解できるはずである。彼が序文で、「私はこれを、身内や友人たちだけの便宜のために書いたのだ」と言っているのは、ただの弁解や謙遜ではない。「読者よ、このように私自身が私の書物の題材なのだ。あなたが、こんなにつまらぬ、むなしい主題のために、あなたの時間を費やすのは道理に合わぬことだ」と言っていようと、それはただ卑下しているのではない。あるいは、作品の主題が自己自身である特異性を衒っているのでもない。モンテーニュがもっとも執着している自己描写から『エッセー』を説明し、それを序文にしたにすぎないのである。それは上に考察した自己描写観の総括であり、少しも変わった所はない。その卒直な表現が公の性格をもつ出版物の巻頭にあるために、戸惑いや誤解が生じるにすぎない。すでに執筆第一期から自己描写は、無為の中にさ迷う、「どこにでもいる<sup>29)</sup>」がまた「どこにもいない<sup>30)</sup>」ような自己を『エッセー』の中に固定して、確かな存在感を得ようとする感情が絡んでいた。執筆第二期にモンテーニュは自己描写を『エッセー』の主題にする決心をするが、一方まだ自己描写の客観的な意義は不明瞭で、個人的な理由からその存在を擁立するしかない。それならば、存在感の欠如を補償すべく生まれた自己描写が、次に「身内や友人たち」とのつながりを求めたとしても不思議ではない。作品の出版は、自足的に満たして来た存在感を他者との関係の中に発展させ、そこに新しい存在を築き上げようとする願望の表われである。モンテーニュがまだ世間の読者、つまり人間一般との関係の中で自己描写を意味づけ得ないとすれば、せめて肉親や隣人や友人の中で『エッセー』という彼の存在を確立しようと思うのは当然である。「読者に」の序文は決して謙遜でも卑下でも韜晦でもない。モンテーニュのこのような感情の卒直な表現なのである。自己描写という存在様式の当座の到達点を表わす真実の言葉なのである。

——第二章の（４）終り——

#### 註

- 1) I—XXVI, p. 187—p. 190 ; p. 105—p. 106. 前者は以前紹介した 1580年版『エッセー』のページ数、後者は邦訳を拝借している 原二郎氏訳『エッセー』（筑摩書房世界文学体系）のページ数を示す。ただし邦訳はこの論文の方法に従い、1580年版に合わせて修正している。以下同様。
- 2) II—XXXII, p. 536—p. 537 ; p. 90.
- 3) cf. II—VIII, p. 78—p. 82 (Ce n'est pas à dire qu'on leur donne par telle voie d'obligation..... car je ne veux pas qu'on s'y mesconte, à quelque part que ce soit.); p. 281—p. 285 (こう申したからと言って、あとで取消しのできぬような約束で……人から間違っで見られるのは、どっちにしてもいやだからです)。ただし最後の「自」はのちの加筆。
- 4) I—XXXIX, p. 365 ; p. 176.
- 5) par. ex. 「私は他人にどう見えるかということをそれほど気にしない……」(II—XVI, p. 420 ; p. 20) はエピクロスやカルネアデス (p. 413 ; p. 16) と対峙する。
- 6) II—XXXVII, p. 596—p. 602 ; p. 114—p. 117.
- 7) cf. II—IV.
- 8) I—XXVI, p. 199 ; p. 111.

- 9) II—XII, p. 335—p. 340 ; p. 416—p. 418.
- 10) par. ex. I—XXVI, p. 231—p. 241 (Les Atheniens, dict Platon, ont pour leur part.....il la faut espouser.); p. 128—p. 132 (アテナイ人は(とプラトンが言っております) 彼らの特徴として…  
…これを娶らなければなりません)。
- 11) 拙稿(その六), 天理大学学报第97輯参照。
- 12) I—XXVI, p. 190 ; p. 107.
- 13) II—X, p. 96 ; p. 293.
- 14) II—XVII, p. 456—p. 457 ; p. 41—p. 42.
- 15) 拙稿(その七), 追手門学院大学文学部紀要第9号参照。
- 16) II—XVII, p. 430 ; p. 25.
- 17), 18), 19) いずれも, II—XVII, p. 429 ; p. 25.
- 20) II—XVII, p. 430—p. 431 ; p. 25—p. 26.
- 21), 22) いずれも II—XXXVII, p. 643 ; p. 133.
- 23) II—VIII, p. 67 ; p. 276.
- 24), 25) いずれも II—XVII, p. 457 ; p. 42.
- 26), 27), 28) いずれも II—XVIII, p. 471—p. 474 ; p. 48—p. 49.
- 29), 30) いずれも I—VIII, p. 31 ; p. 22.